

快適な畜舎環境づくりを!!

～新鮮な空気や水を取り入れましょう～



【豚編】

飼養衛生管理基準(豚、イノシシ)が改正され、畜舎などに野生動物侵入防止のためのネット等の設置が義務づけられます。ネット等は網目の大きさが2cm以下のものとされており、目詰まりを起しやすく、暑熱対策の要となる空気の入れ替えが難しくなります。また、呼吸器疾患の増加も懸念されますので、ネットや寒冷紗のほこりはこまめに除去し、少しでも風の通りが良くなるよう心がけましょう。

同基準の中には「衛生管理区域内の整理整頓及び消毒」という項目があります。具体的には、畜舎を含む家畜飼養施設周辺の草刈りや枝切り、不要物品の片づけや消毒を定期的に行うことで、野生動物の隠れ場所をなくし畜舎への侵入を防ぐことや、不要物品に病原体が残存することを防ぐ目的で設定されたものですが、畜舎内・外の清掃を効率化し風の通り道を確保するうえでも非常に効果的です。

送風機や扇風機を併用し、密飼いを避け、毎日の健康チェックを行う。家畜飼養者の皆様にとっては当たり前に実施していただいていることが、暑熱対策としても重要ですので、引き続きのご対応をよろしく願います。

(金谷)



【鶏編】

暑さによるストレスは鶏の成績に障害を与える大きな要因となります。気温が上昇するとともに、鶏にはいくつかの兆候が表れてきます。気温が27℃程度まで上昇すると、まず飼料の摂取量が低下し、その後産卵率や卵重の低下などが表れてきます。

本格的に暑くなる前に鶏舎環境と設備の整備をしておくことが非常に重要です。今のうちに、飲水機器、換気ファン等の確認を行い、鶏舎周辺を整理整頓して空気の流れを遮るものや、熱源となってしまう鶏糞を取り除いておくようにしましょう。気温が上がってきたら、冷たく新鮮な水の給与を心がけ、日中の最も暑い時刻には給餌を避ける、ストレスがかかる作業は涼しい時間帯に行う、などの調整が必要です。ミストなどで鶏に直接散水する場合は扇風機等の併用をお願いします。

鶏はほかの動物と異なり、体温を放熱する役割をする汗腺がありません。そのため、環境温度が35℃を超えると、鶏は口を開けて呼吸(パンティング)をすることで体内の熱を排出し、体温を調節しようとします。パンティングが過剰になると、体内の二酸化炭素が過剰に排出され、通常弱アルカリ性である血液がアルカリ性に傾き、増体、産卵性、免疫機能の低下を引き起こすこととなります。これを防ぐためには、重曹を水や飼料に添加(0.5~0.7%)して与えることが有効です。

(宮田)

